

中国のほんの話(19)
北京の下町に生きる人々を
描く作家・劉心武

蔭山 達弥

北京の人気夕刊紙『北京晩報』の文芸欄「五色土」に『温榆斎隨筆』という表題で毎週不定期にエッセイを寄稿している作家がいる。その作家の名は劉心武、中国の文芸雑誌『人民文学』の元編集長で、かつて故松本清張氏とも深い親交があった。彼の作品はわが国で多数翻訳出版されている。彼の最近のエッセイ集『人在風中(人は風の中にいる)』は読者を魅了して止まない。同書に収められている同じ表題のエッセイは次の様な書き出しで始まる。

「縁故関係がある、ある年頃の娘が、ふわりと私を訪ねて来た。私は彼女の祖父を思い出した。当時、彼は私にとても良くしてくれたのだが、既に世を去って8、9年になる。その時、心の中で思わず一頻り追憶と憂鬱が浮んできた。彼女との話の最中、私は彼女の服装や化粧がかなりモダンであることが気になった。髪型は短く、めっちゃめっちゃで、上着はぴったり体にくっつき、おへそが出ている。特に私をはらはらさせたのは足に履いている上げ底靴である。」…少女は私の批判を聞いて、相変わず微笑みを浮かべながら、遠慮して言う。「流行は風です。風を迎えるにせよ、風に逆らうにせよ、人はいつも風の中に生きることから逃れられない。」

劉心武はここ数年、本業の小説よりも、エッセイをたて続けに10数冊出し、そのいずれもが読者の反響が良い。劉心武は1942年、四川省成都に生まれた。8才の時に、一家全員で北京に移り住み、北京師範専科学校を卒業すると、中学校の国語の教師になった。彼の文学活動は早く、雑誌・新聞に投稿というかたちで中学3年の時に始まったが、実質的には文化大革命が終わった1978年、自ら辞した教師経験をもとに発表した『班主任(クラス担任)』がデビュー作となる。



1997年10月、NHK(BS2)の『週刊ブックレビュー』で放送されたインタビューの中で、劉心武は『班主任』について、次の様に述べている。

「北京の中学校で教えていた15年のうち、10年が文化大革命の時でした。その間、中国の教育は大きな打撃を受けたのです。学校には正常な教育秩序もなく、私は教育者としての役割を十分に果たすことができなかつた時、そのように混乱した教育現場から離れ、別のことをしようと思いました。『班主任』はその文革時代の教育現場の混乱を描いた作品です。もし、文化大革命がなかったら、私は教師を続けていたでしょう。」

劉心武の代表作の一つ挙げるとするなら、『鐘鼓樓(邦訳「北京下町物語」、恒文社)』であろう。この作品は昔のたたずまいを残す北京鐘鼓樓近くの四合院(伝統的家屋)に住む10家族の12時間のことが書かれている。この作品の魅力はその構成にあると思う。作者が「みかん式」と名付けているように、みかんをむいてみると中のは実は袋ごとに独立したものとなっているが、しかし、それを合わせると一つのみかんとなる。難しいやり方だが、これで『鐘鼓樓』を作り作者は成功した。劉心武は北京という町の運命、そしてそこに暮らす人々の運命というものを常に文学的テーマにしている。鐘鼓樓を小説の舞台に選んだことについて、「鐘鼓樓の付近は北京の中でも比較的昔のたたずまいを残しています。…また外部の人間がなかなか手をつけることができない場所でもあります。そのような場所だからこそ、人々の生活や心は時代によって大きく左右されます。私が北京の新しい生活を描くために、鐘鼓樓を選んだのはそういう理由からです。」と述べている。北京の下町の庶民の生活を知りたい人は劉心武を読むべし。

かげやま たつや(助教授、中国文学)